
美しい月の夜に....。

いちご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美しい月の夜に…。

【Nコード】

N6329Y

【作者名】

いちご

【あらすじ】

「綺麗な月ね…。」

——人間界と地上界。

地上界の天才月騎士^{ムーンナイト}と呼ばれる美月^{みつき}は、人間ではなかった。

地上界に生まれる月騎士は、人間の人生を決める重要な存在だった。

心を闇に封印された美月の前に、次々と敵が現れる。

——遠い昔、人と人の間に生まれた憎しみ。

生まれてきた意味を探して、最期に美月が選んだ答えとは…？

人間界の夜

——美しい月の夜。

街は暗闇に包まれ、人間達の気配は、段々と消えていく…。

そんな人間界を、高い塔の上から見下ろす一人の美しい少女がいた。

彼女の名前は、かざまい みつき風舞美月。

ブラウンの長く美しい髪を持ち、ゴールドの大きな瞳は、この世界の暗闇を映していた。

「美月、そろそろ地上界に帰ろうよ。」

彼女が座っている隣に、可愛らしい顔の10歳程の少年が不機嫌そうに立っている。

彼の名前は、おに ひろと鬼百輝瞳。

「輝瞳…さっきからそればかりね。うるさいわよ…。今話しかけ

ないでよね。考え事をしているんだから。」

すると、輝瞳と呼ばれる少年は、一つ盛大な溜め息をついて大声でこう言った。

「バカ美月！人間界に行ってるって上層部にバレたらどーするんだよ。僕ら殺されちゃうよ！」

自分の身の危険を感じる輝瞳は、徐々に顔色が悪くなっていく。

「輝瞳。大丈夫よ、安心なさい。私の才能溢れる能力で、地上界の時間を止めてるから。」

ウインクをしながら自慢気に言う美月に、輝瞳は呆れている。

「まったく！今の美月の力じゃ、あの巨大な地上界の時間を止める力はないよ。」

——第一、そんなこと、神様だって出来やしないさ。

「ふん。何よ…、可愛くないわね。そんなにここが嫌なら、貴方一

人で帰ればどう？あたしは、ここに残るわ。」

輝瞳の言葉でますます不機嫌になっていく美月。

「おいおい、変な冗談言うなって。お前、ますます性格悪くなってるよ。」

暫く二人が喧嘩していると…

コツ…コツ…。

「しっ！何か聞こえない？私達以外に誰がいる…。」

規則正しい足音は徐々に近付いてくる。

「駄目だ…。バレたんだよ。もう僕達はお仕舞いだ。」

「バカ！まだわからないじゃない。一応、武器を構えて…。」

二人は身構え、それぞれ手に短剣を握る。

すると、二人の前に黒い渦が現れ、それは人影になっていく。

「はぁ……。お前達、そんな小さな武器でこの俺を殺せると思うか？」

突然現れた彼の名前は、とうまかなた藤真天空。

「天空！！」

「げっ！！」

彼は、スーツを着た、美形の青年である。

「まったく、お前達には呆れるな。輝瞳！美月の監視を任されていたらはずじゃないのか？お前の仕事は何だ？」

「ごめんなさい、天空。…僕も一応止めたんだけど、美月が頑固だから。」

でも、少しでも美月のためになつたらと思つて…。」

天空に怒られて落ち込む輝瞳。

一方で、無関心の美月。

「美月！お前にも怒ってるんだ。人間界に無断で行くことは、禁止されているはずだろう？」

「そうだったわね。でもこれは、仕事の下見よ。どの人間があたしに相応しいか、この目で確かめたくて。」

反省する気がない美月を見て、溜め息をつく天空。

「お前が担当の人間を決めるんじゃないだろ。担当を決めるのは、地上界の上層部だ。」

「うるさいわね。あたしの気も知らないで……！」

あまりにも激しい二人の喧嘩に恐怖を感じた輝瞳。

「おい、二人共！こんな所で喧嘩は止めようよ。こんなことして間に時間が過ぎてくだろ……。」

人間界に行っただけで、死ぬなんて御免だ。」

すると、輝瞳の必死な様子が伝わったのか、二人は一旦、大人しくなった。

「安心しろ。上層部にはうまく誤魔化しておいたから。でも、次にルールを破ったら、命は無いと思え。」

「そっか…ありがとう…。天空は、やっぱりすごいや。」

輝瞳の顔はパアと明るくなり、命の恩人を見るような目で天空を見つめた。

それでも、相変わらずそっぱを向いたままの美月。

「しょうがないな。考え事してたんだろう？そういう時間も必要だもんな。」

そう言って美月の横に座る天空。

「え……。」

天空はニコツと笑う。

「何よ…いきなり。じゃあ、静かにしててよ！」

あ、あたしが立ち上がったら、もう帰るって意味だからね…！」

美月の素直じゃない可愛らしい所に、天空と輝瞳は、内緒で目を見合せ笑っていた。

地上界の屋敷（前書き）

美月^{みつき}達は、冬の人間界から地上界に戻ってきます。

まだ夜が明けていない地上界で、美月と輝瞳^{きらと}は、天空^{かなた}の屋敷にお邪魔します。

地上界の屋敷

——冬の地上界。

人間界と見た目は同じでも、何かが違う気がした。

「お帰りなさいませ、ご主人様。…美月様のお部屋もきちんとして用意いたしております。」

地上界でも有名な豪邸のメイドが出迎えに来た。

「ああ、助かるよ。ちなみに、追加でこの子もいるんだが。」

天空の背中におぶられた輝瞳は、可愛い寝顔をしていた。

メイドは、チラッと輝瞳を見て、「かしこまりました。彼のお部屋も只今ご用意いたします。」と無表情に言った。

「結構よ。輝瞳は私の部屋で寝かせるわ。離れたくないもの。」

美月は、不安そうな顔でそんなことを言った。

「了解。……そういうことから、やっぱりいいよ。すまない。」

「かしこまりました。」

動作は、ロボットのように完璧だった。

この屋敷のメイドは、感情というものが無い。

案内された部屋に入ると、美月は、無駄に広い空間が気に入らなかった。

「疲れただろ。明日は学校だから、早く寝た方がいい。輝瞳は、ベッドで寝かせるけど、美月はどうする？」

輝瞳を大きなベッドに寝かせながら尋ねてきた。

「隣に寝るわ。…後は、自分でやるから。」

もう一人にしてほしい、とでも言うように静かに眠りにつく美月。

天空は、しばらくこの部屋でティータイムを楽しんでいた。

すると、小さな寝息が聞こえてきた。

「やっと眠ったか…本当にお前は、いつも俺に心配をかける…。」

美月が眠るベッドに腰をかけ、額に手をかざした。

すると、天空の脳裏に美月の隠された想いが刻まれていく。

天空は、他人の考えたことがわかる能力に優れている。

一人残された美月。

——お母様、お父様。

どうして、私を残して死んじゃったの。

辛い訓練は、もう嫌だ……。

「お前は、地上界でエリートと呼ばれる風舞家に生まれたんだ。

当然、月騎士の訓練を受けなければならない。」

上層部は、そうやっていつもあたしを閉じ込めようとする……。

「あれ、風舞美月じゃない…行こ行こ。怖いよ、あの子。」

——離れていく人。

「風舞家の娘の様子は…?」

「まだ若干の感情が残っているようだ…。早く、感情を忘れさせなければな。ロボットに優しい心など、必要ないだろう。」

「風舞美月は、我々の誇りだ。武器として最強に育った時、地上界は更なる革命を起こすだろう。」

みんなあたしを利用している。

心が壊れてすべてが、思い出さえも無くなってしまっ

いつか、お母様とお父様も思い出せなくなる。

どんどん感情を忘れていつちゃう。

暗闇の中に、一人だけポツンと立っている悲しい顔をした美月がいた。

「やっぱりな……。」

美月の心を見た天空は、先程の美月の様子が理解出来た。

「可哀想に……。辛いだろ、誰にも言えないで。」

まだほんの少し幼さが残る可愛らしい寝顔を見つめて、溜め息をつく。

「……おい、天空。人の記憶を勝手に見るなって……。」

天空は突然、隣から発せられた声に驚いた。

「輝瞳、起きていたのか。」

彼は、ベッドに横たわりながら二人の様子をじっと見ていたらしい。

「だって、目覚めちゃってさ。ねえねえ、美月はどうだった?」

不安そうな輝瞳。

「どうやら、まだ人間のような心が残っているらしい。」

「え！本当か!?!」

「静かに!」

天空は、大きな声を出した輝瞳の口を塞ぐ。

「美月が起きてしまっただろ?」

すると、輝瞳は小さな声で言った。

「ごめんなさい…でも、嬉しくてつい。もう駄目かと思っていたからさ…。」

悲しそうな顔でベッドから起き上がる輝瞳。

「美月、突然人間界に行きたいって言ったんだ。どんな感情が残っていたの？」

「ああ…苦しいとか辛いとか、悲しいとか、人間でいったらそんな感じかな。」

「やっぱり明るい感情じゃないね…。でも、残っているだけマシだよ。もし、美月が感情を無くしたら、ただの従順ロボットだもんな。」

「だがな…」

天空は、何かに引っ掛かっていた。

「どうしたの…？天空。」

喜んでいた輝瞳に対し、気まずそうにこう言った。

「いや…それが…。美月は、記憶喪失になりかけていたんだ。いつか…いや、もうすぐ心だけでなく、記憶さえも無くなるだろう。」

残っていると言っても、ほんのわずかなものだしな。」

「そんな…それじゃあ美月が…、美月の両親が可哀想だ！二人は、美月のために死んだのに…。」

「二人とも、どうかしたの…？」

輝瞳の声で目を覚ました美月は、二人に視線を向けた。

「ああ、起こしてしまったて悪かったな。もう少し、休んでいていいよ。」

輝瞳は、なんだか美月の顔が見れなくて、うつ向いている。

——美月の顔を見たら泣いちゃうもん。

「輝瞳…どうかしたの？具合でも悪いの…？」

その言葉に輝瞳は驚いて涙が出てしまった。

——美月は、まだ優しい心無くしてなんかいない！

「なんでもないっ。ちょっと顔を洗ってくるよ。」

そう言って輝瞳は、美月から逃げるように部屋から出ていった。

「何よ、あれ。天空…！もしかしてリクを叱っていたんじゃないでしょうね？」

——あたしが無理やり人間界に連れていったから…。

「そんなわけないだろう。あんな心の優しい子を叱るはずがない。」

あり得ない…とでも言うような表情をした。

「そう。まあ、いいわ。ところで貴方、なぜここに？さっき、出て

いけと言ったわ。」

「嘘をつけ。雰囲気だけ漂わせただけで、言葉にはしていないだろうが。」

言葉にしまぎや、相手に伝わらないこともある。

何か、俺に言いたいことはないの？」

一瞬美月は驚いたような顔をしたが、すぐにいつもの顔に戻った。

「いいえ。何もないわ。天空は他人でしょ。あたしのことなんてどうだっていいじゃない！早く、出ていって。」

「わかった。だけど、美月。」

天空は、ベッドに座る美月と視線を同じにして真剣な顔で言った。

「お前のことをどうでもいいと思ったことなんて、一度もない。」

俺にとって、美月と、美月のお母さん、お父さんは大切な人なんだ。

「

予想外の天空の言葉に、どう反応したらいいかわからなかった。

「明日、学園で待つてるよ。今日は、今から仕事で、ここを留守にするから。必要なものがあつたら、さっきのメイドに頼むといい。」

一方的だったけど、美月は、「わかったわ。」とだけ返事をした。

「じゃあ、また明日。まだ夜が明けていないから、寝てるよ。」

そう言つて天空は、手を振りかざし、一瞬で姿を消した。

部屋のドアの隙間から少しだけ見える、小さな人影。

「輝瞳…どうしてそんな所で聞いているの。早くこちらに来たらどう？真冬なんだから、廊下は寒いでしょう。」

「なんだ…バレてたのか。」

輝瞳は、二人が話しているのを廊下でこっそり聞いていた。

「変な子ね…。そう言えば…さっき貴方、なぜ様子がおかしかったの？」

「えっ！別に…なんでもないよ。朝は顔を洗うのは当然だろう。」

——僕、嘘付くの苦手なんだって…。

泣いてた、なんて言えないし。

「あのねえ。今、何時だと思ってる？深夜3時よ。貴方いつも寝坊して、あたしより起きるの遅いじゃない？」

——完全に怪しまれてる。

「目が開いちゃって。本当になんでもないからな。」

「輝瞳も天空も、さっきからなんか変よ。あたしに隠し事はしないって、小さい頃からの約束でしょ？」

「その約束を覚えているなら、そのまま美月に返すよ。」

「どういう意味よ。」

——良かった。まだ美月のままだ。

「美月も隠し事は、ダメってこと。言いたいことは、言わなきゃ。じゃあ、僕も行こうかな。」

「どこへ?。」

「ちょっとね…気分転換にブラブラしてくる。」

「こんな深夜に…?やっぱり変!。」

すでに輝瞳は、支度を済ましていた。

「ねえ、美月。前から言いたかったけど……僕も美月が大切な人だよ。」

ニコッと笑った輝瞳は、そう言い残して、静かに姿を消した。

「はあ……。」

——なんか、よくわからないけど、二人の言葉に安心したあたし。

「なんかもう、眠れないよ……。」

——こうして地上界の夜が明けていった。

神楽学園高等学校（前書き）

藤^{とう}真^ま天^{かな}空^たは、実は学校の先生でした。

夜が明けるまでの天空サイドの様子です。

新たな敵も登場…？

神楽学園高等学校

「藤真先生。最近働きすぎです。深夜の給料は入りませんからね。」

天空は自分の屋敷を出て、美月が通う神楽学園かぐらにいた。

「……明日の授業のプリントを作らなきゃならないので。お気になさらず。」

同僚の言葉に少しムカつきながらも、黙々と仕事をこなしていく。

「それはお疲様ですねえ。そう言えば、あの天才美少女はどうなったんでしょうね？」

「……はい？天才美少女って誰ですか。」

随分いいあだ名だな……しかし、美少女なんてウチの学園にいたっけか。

「なんだ、知らないんですか。貴方が毎回気にしてる、うちの学園の生徒……風舞美月のことですよ。最近、貴方との仲を噂されているようですが。」

同僚の言葉に動揺し、作成中のプリントが破けてしまった。

「うわ…最悪だ。もうすぐで仕上げだったのに……。」

「何か心当たりでも？貴方は教師、彼女は生徒ですが？」

「いや、なんでもありませんって…。第一なんで俺が噂に…？」

——聞かない方が良かったか…？

まさか、さっきまで一緒だったのがバレたのか。

「いえ。貴方は生徒にイケメン先生と言われているので。それと、最近話題の絶えない風舞さんをくっ付けてみただけです。

いわゆる、妬みというやつです。」

——バレてなかったのか…。

驚かせんなよ、ブサイク先生。

「……まあ、あまり彼女を自宅に連れていけないことですね。誰かに見られでもしたら貴方破滅です。」

——って……バレてたのかよ！

「あの、吉崎先生……？」

「さっき見かけたもので。もし貴方が僕を怒らせるようなことがあれば、即ばらしますので。」

「……………」

啞然とする天空。

「あ、……天才美少女って言うのは、一体どうやって付いたんでしょうね……。」

——話題変えるしかない……だけどまた美月の話じゃ意味ないだろ俺！

「上層部から噂が伝わってこつちまで来たんです。彼女が月騎士のエリート一家に生まれた血筋ってことが一つ目の理由。もう一つは、僕達が教えるすべての教科がパーフェクトにこなせることが由来だそうで。」

美少女は、ただ単純に見たままと言っていますが。」

——なるほど……。

「しかし、朝方の仮実習は、珍しく失敗したようですが。」

「仮実習か……。」

——上層部。何を考えているんだ。

「地上界上層部がお見えになった時は、驚きました。上層部が授業を見学するなど、異例ですからね。」

「ああ。そして、クローン人間を相手に、上層部は実力を見せつけようとさせていた。」

——その時まで、何も知らなかった。

美月がクローン人間で訓練をさせられていたことに。

「しかし、疑問ですね。僕達の仕事は、人間達の長い人生に関わって運命を導かせること。一日で終わるはずがない。」

「俺もそう思いました。けど、後で上層部に聞いた所、そのクローン人間は、人生が一月で終わるように造られていたそうです。」

随分と、雑なやり方でしょう？

彼らは、風舞の能力を向上させようなんて、本当に思っているのでしょうかね……。」

——1か月前……。

「風舞美月、お前に新たな訓練材料を与える。」

ここは、地上界上層部基地。

地上界の半分を占めると言われ、巨大な敷地を誇る。

「新たな材料……？」

美月の目の前に現れたのは、一人の少女。

「これはクローン人間だ。我々がお前のために造ったものだ。普通の人間と違うのは、寿命が一月ということ。

そして、将来、お前が担当する人間のクローンだ。」

そのクローン人間は、幸せに、何も不自由が無い生活を送ってきた少女だった。

「風舞美月は、僕達の目の前で、そのクローン人間を殺めようとした。未遂で終わってよかったですね。」

「正直ショックでした……クローン人間の寿命があの時ちょうど尽きる頃だったみたいで。」

風舞は最期に首を絞めようとした。」

いくら運命を左右出来る俺達でも、人間を殺めることは、ルール違反だ。

「でも、あんまり手に力が入ってなかったみたいで、大丈夫でした

ね。上層部の一部は、自分達が育てている兵器をお披露目する予定だったでしょう。」

「焦っていましたね。」

——美月が首を締めた時、俺は何も言えず、ただ立ち尽くしていた。

無表情で殺そうとする美月に、衝撃を受けたのは事実。

俺は、今まで美月と生きたすべてが壊れてしまうようで怖かった。

本当は、美月と輝瞳が人間界に行くところを見ていたが、あえて止めなかった。

「藤真先生、吉崎先生。夜遅くまでお疲れ様です。お茶を持ってきましたよ。」

天空が悩んでいると、目の前に学園の教師の中でも際立って美しいと評判の若い教師がやって来た。

「わざわざ、ありがとう。」

「すみません。」

「ところで藤真先生、今担当している人間の少女はどんなの？」

「

「病気が進行してまして。寿命を延ばすか考え中ってところですかね。」

「さすがは現在ナンバー１の月騎士ですね。寿命を延ばすなんて技術が必要ですもの。」

でも、さぞかしい子なんでしょうね。

月騎士にそこまでさせるなんて。」

——確かに性格は悪くない…。そうだ、いい考えが思いついた。

「風舞美月の担当の人間が決まるのは、いつかわかりますか？」

「ええ。確か…あと一週間後ですよ。」

女教師は、持っていた個人情報資料に目を通して答えた。

彼女は、美月の担任である。

「ちょうどいいかもな……ありがとう。」

——上層部に駆け寄ってみるか。

「藤真先生……今、何を考えているのか、当てて差し上げましょうか。」

女教師は、何故か面白そうにしている。

「風舞美月のことをあまり気になさらない方が宜しいかと。周りの人に誤解されますわ。」

天空が前から美月を気にかけていることは、先生達もよく知っていた。

「生徒が困ってるんです。なるべく気を付けます。」

「ふふっ……では、失礼します。」

「……あの女には、気を付けた方がいいでしょう。」

さっきまで黙って聞いていた吉崎先生が口を挟んだ。

「なぜです？」

「いえ…別に。」

特に聞かなくてもいいと思った天空は、上層部に向かった。

——美月、お前を助ける方法を見つけたかもしれない。

朝日が眩しく地上界を照らし始めていた。

「どうだ……様子は？」

「ええ。万事、うまく行っておりますわ。」

新たな闇がすぐそこまで来ていることなど、天空は知るよしもなかった。

メイドと美月の記憶（前書き）

天空^{かなた}と、輝瞳^{きらこ}がいなくなつて、屋敷に残された美月。

それから美月が学園に行く時間までのことです。

メイドが登場します。

彼女の名前は、花蘭^{からん}。

意外と美人。無表情だけど、結構強い。

メイドと美月の記憶

——まだ夜が明けたばかりの地上界。

美月は、屋敷の屋根の上に座り、街を眺めていた。

「美月様、紅茶をお持ちいたしました。」

その声に振り向くと、さっきのメイドがまた無表情で立っていた。

「どうも……ところで貴女。もう少し、笑顔になれないものかしら？」

首を傾げるメイド。

「それは……ご命令でしょうか？」

——何それ。命令じゃなきゃ、やらないってことね。

「そうよ。貴女は、お客さんにこの屋敷をよく見せなきゃならない仕事があるでしょ。」

メイドが無愛想じゃ、印象が悪くなるって言ってるの！わかった？」

メイドの発言に少々ムカついて、つい怒り口調になってしまった。

「理解しました。では、そうさせていただきます。」

……ニコッ

すぐにメイドは満面の笑みを浮かべ、美月を見ている。

「そうそう。やれば出来るじゃないの。」

美月は、紅茶を飲みながら暫くボォー…としていた。

——そういえば、さっきから物音がしないわね？あのメイドはどこに…？

「うわぁっ！！」

——まだ笑ってたの…！？

メイドは美月のご命令通りにずっと笑みを浮かべ続けていた。

美月が止めない限り、永遠に続きそうだった。

「信じられない！貴女は、本当に命令通りにしか出来ないの…！？」

「はい。以前、ご主人様にも同じ様なことを言われた覚えがあります。」

「はい…？いや、もう笑うのは止めていいわよ。命令よ、命令。」

「かしこまりました。」

——天空様が十五歳になられた頃。

「おい、ちょっといいか？」

「はい。何かご用でございましょうか？」

当時の藤真家は、天空様のお父上である、藤真光夜様とうま こうやが当主でございまして。

「前から言いたかったんだけど、なんであんたはそんなに無表情なんだ？もっ少し笑え。」

「それは……ご命令でしょうか……？」

天空様は、先程の美月様のように非常に不可解な表情をしておりました。

「違う。笑った方があんたのためにも、いいって言ってるんだ。」

「天空。…余計なことを言うな。」

「お父様…。」

私から見てお二人は、考え方も性格も正反対の方でした。

「またお前が下らない発言をすることで、藤真家の名が廃れるだろう?。」

——光夜様は、当時の地上界で有力者と呼ばれる存在でありました。

また、藤真家は、代々地上界上層部に身を置く、エリート一族。

「お父様…貴方の月騎士を育てるための教育方針…どうかと思いますね。」

屋敷の奴らまで、洗脳させてしまう。

俺は、すべてが悪の貴方が嫌いだ。」

「天空、お前はここに生まれるべき子ではなかったのかもしれない。」

「どういう意味だ。」

「そのままだよ。」

——考え方がまるで違うお二人は、天空様が幼い頃からいつも対立をしておりました。

「何、突っ立っているんだ、お前は。仕事に戻れ。」

「申し訳ございません。失礼致します。」

「天空がそんなことを…。」

「はい。」

「で、貴女は、結局笑えないのね。」

「話には、まだ続きがございます。」

——私が洗濯を終え、仕事が一段落ついたところ。

「あ……………」

ちょうど、廊下で天空様とすれ違ったのです。

「何かご用でございましょうか？」

「紅茶が飲みたい。」

「かしこまりました。」

「それと、もうひとつ命令だ。……カップを追加で。アンタも休憩しよう。」

いつものようにニコツと笑って、おっしゃいました。

「かしこまりました。」

私は、ご命令通りティーカップを二つ用意し、お庭で天空様とお話を致しました。

「この間は悪かったな。父親とはうまくいってなくて。……ってア
ンタに言っても仕方ないか。」

「いいえ。理解しました。」

「アンタは、あの父親をどう思う？」

「光夜様は、私や、私の周りの者に、よく似ております。ですから、
私も光夜様の考え方は納得でございます。」

「……そうか。アンタもあの男に支配されているんだな。」

——私は、その言葉の意味が未だに理解出来ません。

「ですが……一つだけ言えるのは、天空様は、藤真家の誰とも……い
え、地上界で生きる者の誰とも違うということです。」

「なるほど？そういう違いは感じ取れるのか。」

天空様は、探るように私に何度も質問を投げ掛けてきました。

「くそ、なかなか笑わないな、アンタ。」

「一つ、よろしいでしょうか？」

「なんだよ？」

——私から他人に質問するなど、生まれて初めてでした。

ですが、私を一生懸命に笑わせようとする意図を知りたかったので
す。

「私は、笑うことが出来ませんが、人間は笑うと聞いたことがあります。
なぜですか？」

——天空様は、一瞬驚いた顔をなさいましたが、私の質問に丁寧に
教えてくれました。

「人間は、心を持っているからだよ。」

「心……………」

「そう。環境の変化によつて、心が感じとるんだ。楽しい、嬉しいつて。だから、自然と笑える。笑顔は、人を喜ばすことだってできる。」

他にも、色んな心があるんだ。悲しい、悔しい、苦しい……。」

「それ、騒がしくありませんか…？」

天空様は、一瞬話すのをお止めになりました。

「地上界の奴らはその心を持っていない。」

それは、とても悲しいことなんだ。

この地上界に生まれてくると、心を持たないで生まれてくるらしい……俺も詳しくは知らないが。」

「しかし…何かをしても、何も感じる事が無いなんて…生きてる意味なんてあるのかな…。」

ポツリとおっしゃる天空様は、今まで見たことがない顔をしておりました。

「私は、こうして屋敷で働く使命があり、それが生きる意味だと思

っております。

… 天空様は、その人間のような心をお持ちなのですね。私が天空様は皆と違つと感じていたのは、それでしたか。」

天空様は、何も語りませんでした。

「今のお顔は、どのような心の表れなのですか？」

「……………。これは、悲しみの顔。花がしぼんで枯れたような感じ…
つて言ったらわかりやすい？」

「花が枯れると、私は抜いて捨てます。」

「…………。ダメだ…こりゃ。」

「それから、何度も笑う練習を致しましたが、人間のように、うまく笑えませんでした。」

「いや…笑うって、練習して出来るものじゃないのよ。」

呆れたような顔をする美月。

「でも、あたしも貴女と同じ様になるかもしれないわ。」

——走って、走って逃げ続けた。

「お帰り、美月。今日はなかなか早かったな。」

クスクス笑う天空は、屋敷の玄関のドアに寄りかかって、立っていた。

「…お、お帰りって、ここあたしの家じゃないし!」

「でもお前、毎日のようにここに来るだろ?すっかり馴染んじゃってな。そんなに俺が好きか?」

「違うわよ！ただ紅茶が美味しいから！」

——本当は、すごく嬉しかった。

天空がいてくれて……すごく安心して。屋敷に入ったら、天空が敵から守ってくれる気がした。

「おいで、もう用意してあるから。」

その時……

ガオ……グルル……

振り返ると、何匹もの狼が屋敷を囲っていた。

「きゃあー！」

「花蘭^{かしん}！屋敷の者を呼べ！」

天空がメイドに言っていると屋敷のすべての使用人達が出てきて、武器を

構えた。

「ククク……藤真家のご子息が、風舞家の娘を隠していたとは……。」

一匹の狼が獲物を見つけたかのように美月に近付いて来る。

天空は、美月を素早く自分の元に隠した。

「いくら上層部であろうとも、ここから先は我が藤真家の領域。入ることは許さない。」

「しかし、風舞美月は、我々の訓練を抜け出してきた。処罰を与えなければならぬ。大人しく、こっちへ来るんだ!!」

「いいか、お前達。絶対に屋敷に入れるな!」

「行け! 殺しても構わない!」

ガオ……………!

「早く、屋敷へ。」

ガンガンと武器を鳴らす音が聞こえる。

——屋敷に入ったあたしは、放心状態だった。

「大丈夫か？」

天空はそんなあたしを不安げに見た。

「あたし…やっぱり戻ろうかな…。」

「どうして？」

「だって！屋敷の人達が危ないよ！それに、天空にも迷惑が…。上層部に殺されちゃうかもしれない！」

うつ向いたあたしに、近寄る天空。

「安心しろ美月。あいつらは絶対死なない。エリート一家の藤真家

が雇っているんだからな。

俺は、大丈夫だ。

……それにお前、抜け出してきて偉いじゃないか。」

「は……？」

予想外の言葉を受け、美月は驚いた。

天空は、美月の頭を撫でてこう言った。

「自分の考えでここに来たんだろ？嫌だっと思って思ったんだよな。それでいいんだよ。」

「どづいつこと？」

「誰かの命令をただ聞いてるだけじゃなくて、自分で考えて行動すること。人間の人生を動かす俺達には、大切なことだろ？」

それに、お前は元々、誰よりも頑張り屋だから、サボってもサボっ

た分、また頑張るよな？」

「……それに、まだ心が残ってる唯一の証拠だから。」

天空は、悲しそうな顔をしていた。

「天空様、処理が終わりました。」

そこには、花蘭と呼ばれていたメイドが立っていた。

「お疲れ。どうだった？」

「自分達の命を守って逃げていきました。」

「だと思った…。」

「あの、ありがとうございました！」

その後、両親が迎えに来るまで天空と一緒にいた。

「でも、後に天空のお父様から言われたの。

——息子はお前のために、時間があるフリをしているだけだ。毎日毎日、お前に構ってられない程、たくさんの仕事を抱えている。

昨日の事は、どれだけ恥をかかされたか。だから、我が家に近寄るな。……って。」

「そうでしたか。」

「だから、あたしあれからここに来なかったでしょ。」

「はい。」

「貴女のように無感情になる日も遠くないわ。

もうあまり記憶も無いから……。」

「美月様、そろそろ学園へ行く時間でございます。」

辺りはすっかり明るくなっていた。

「そうね。あ、今まで話したことは秘密よ。……命令です。」

「かしこまりました。では、車をご用意致して参ります。」

一人きりになる美月。

——どうか、思い出が消えませんが。

屋根の上に立ち、日に照らされた街を見ながら、そう願ったのだっ
た。

秘密の部屋で（前書き）

朝になった地上界。

天空^{かなた}は、学校が始まる前に、上層部にある提案を持っていけます。

上層部の現リーダー、桐谷^{きりたにかいと}海斗。

神楽学園の怪しい女教師、小夜^{しょうや}さよ。

天空の決断は果たして…。

秘密の部屋で

「…相変わらず、嫌な雰囲気だ。」

ここは地上界上層部が拠点を置く城。

この巨大かつ豪華な建物の中で、上層部の者達は働いている。

城の周りには、警備係の男達が規則正しくロボットのようにならんでいる。

天空は、大きな扉の前にいた。

サッ

「藤真天空様ですね？上層部の方々がお待ちになっております。」

案内係なのか、急に目の前に現れた女。

「ああ……。さすが、上層部。俺が来るのもお見通しか。」

女がパンツと手を鳴らすと、大きな扉が音を立て、開いた。

城に入り、長く細い廊下を通り抜ける。

「これはこれは……。天空様。」

廊下を歩く、すべての者が天空を見て、お辞儀をする。

「こちらでございます。」

数々の部屋の中で、ある部屋に案内された。

「ご苦労様。この間は、104号室だったのに……また変わったんだな。」

「申し訳ございません。殺人未遂があったもので。」

どうやら今回は、上層部の秘密の部屋を知られてしまったようです。

「

「外部に秘密の部屋の場合が漏れるなんて有り得るのか？」

上層部の者は、地位や名誉、富、すべてを持ち合わせている。

一般人にしてみれば、羨ましい限りなのだろう。

過去に妬みから、殺された者がいた。

その頃から、上層部の部屋は秘密として、関係者以外は入れない仕組みにしていた。

「セキュリティは万全でした。内部の者の犯行とみて調査中です。」

——内部…ねえ。

「そうか…。もう戻っていいぞ。」

「では、失礼致します。」

女は一瞬で消えた。

何号室か書いていない部屋。

天空は、ゆっくりその部屋に入った。

「あっ——！天空君。久しぶり〜。」

目の前に現れたのは、優雅に椅子に腰かける男。

書斎には驚が一匹、見張りなのだろうか。

男の隣には、眼鏡を掛けた暗そうな女秘書が立っている。

「お久しぶりです。今日は頼みがあって、ここに来ました。」

「へえ…。君の言いたいことは、よくわかっているよ。まあ、座って座って〜。」

——コイツ、いつも変なしゃべり方だな。

「いえ。時間が無いので、ここで結構です。」

「そう。あっ、天空君は、神楽学園の先生だったよね？君のお父さんと同じだ。」

——男の名前は、きりたにかいと桐谷海斗。

俺の父の友人で、かつては地上界のトップ3に君臨した男だ。

——時間が無いって言うてるだろ。

「そんなこと、どうだっていいんです。」

「君をずっと見ていると、光夜君を思い出すんだよねえ。」

天空は何も言わず、桐谷を睨んだ。

「僕が上層部のトップになったこと、お祝いしてくれないの？」

「おめでとついでいます。」

無表情で言う天空。

「ハハッ。まあ、いいよ。」

君が言いたいことは、風舞美月のことだろう？ いいよいいよ。認めてあげても。」

「また勝手に俺の考えを読んだんですね。」

「うん。この能力は便利だよ。」

——プライバシーだろ！

「プライバシーだろ。ククッ。」

「……………」

「ククッ…ごめんごめん。もう使わないよっ。」

要は、自分は月騎士を引退するから、君の担当している人間を途中から彼女に託したいと？」

「ええ…。その通りです。今担当している人間を最後に…。」

「驚いたな…。まだ若いのに引退だなんてえ。どうして…?」

「人間を担当しては、十分にやりたいことが出来ないと思いついて。」

「ふうん。でも、どうして風舞美月に？」

桐谷は興味深そうに天空を見た。

「…風舞美月は、俺の生徒です。最近、彼女は成績が良くない。一週間後に実戦では、失敗する可能性が高い。」

今担当している人間は、俺がすべて把握しています。ですから、風舞美月に任せ、例えば失敗しそうになっても、適切なアドバイスが出来る。そう思いました。」

「成る程ねえ…。だけど、天空君って、随分と彼女を特別扱いしているよね。」

「……………」

「実戦は、彼女だけじゃない。周りのお友達もそろそろ実戦の時期。風舞美月だけというのはどうか？」

天空はフフツと笑った。

「優秀だった者が急に落ちぶれると、教師は戸惑うものなんです。」

「ククツ。僕は教師じゃないからわからないけど…まあ、いいよ。」

「ありがとうございます。」

——良かった…。

「ただし。一つだけ条件があるよ。」

桐谷は、急に真剣になった。

——それから数分後

「でえ？君はいつ引退しよう？」

天空は腕まで捲られたシャツを下げた。

「彼女にバトンタッチした時に。」

「そ。了解。さーちゃん！これ、よろしく。」

そう言つて秘書に契約書を渡す桐谷。

「では、失礼します。」

天空は早く帰りたいと思っていた。

「あ！待つて。忠告があるよあ。」

——なんだよ。

「君が月騎士を辞めたと正式に認められたら、もう人間界は立ち入り禁止だよ。」

「え……？」

「わかるよね……？地上界の者は、理由なく人間界をうろついてはいけないルールがあるでしょ？」

「ああ。……わかりました。」

「じゃあね。天・空・君。」

ギギー……ボタン。

「疲れた……。これでいいんだよな。」

バサッバサッ

鷺が羽を広げ、桐谷の肩に乗った。

「ふふっ…。酷いのねえ。桐谷さん。」

秘書は、黒い渦を巻いている。

「君もおんなじ。さよちゃん。」

現れたのは、神楽学園の女教師…

「楽しみね。あの先生が堕ちていく所を見るの。」

「ああ。ゆっくりと苦しみを堪能するといい。」

「やば…授業だ。」

——美月、お前なら大丈夫さ。

「約束守れなくてごめん。」

——隠し事は無しだよっ！

——約束。指切りしよう。

——うん！約束ね！天空。

腕に刻まれた契約印を押さえながら、天空は城を後にした。

人間学の授業（前書き）

天空^{かなた}が、上層部の城から学園に戻ってきます。

美月^{みつき}は、大人しく授業を受けています。

天空が教える人間学。

心を持たない彼らに伝わるのか。

人間学の授業

「はあ。疲れたわ…。」

——神楽学園高等学校。

ここは、月騎士になるために、人間のことを学ぶ学校である。

今、ちょうど三限目が終わった。

「次は、天空の授業ね…。」

昨夜、屋敷で言われたことを思い出すと、なんだか恥ずかしい。

月騎士は、人間の人生に関わる仕事をしている。

人間に技術、知識、奇跡、絶望を与える。

もちろん、与え方は、その人間によって違う。

与えられた運命を考えて、どう行動するかは人間次第。

月騎士は、同情、優しさで運命を与えてることは、まず有り得ない。

人によって魂の器量分は違うらしい。

人間が死を迎えた時、私達は一旦、魂を地上界の審判にかける。

この審判で見るのは、その人が、魂の器量分をしっかりと生きたか、ということである。

もし、魂が満足していなければ、その人間の担当者、つまり月騎士の力不足ということ。

満足な魂を続々と生み出し、優秀な月騎士と認められているのは、あの天空だ。

「すごいよね…天空。」

美月には、友達と呼べる存在がない。

人間で言う“クラスメイト”は、全員無言、無表情で座っている。

人間界の学校は、もっと騒がしいものだど、両親から教わったことがある。

「はあ…一度、行ってみたいものね。」

四限目を告げるチャイムが鳴り、それと同時に藤真先生が入ってくる。

——天空…。

「授業を始めるぞ。」

先生が指を鳴らすと、四体のモンスターが現れた。

「うわ…。」

——いつ見ても、好きになれないわ。

モンスターは、足が四本あり、目が純血している。天空曰く、鳥類

らしい。

強いて言えば、人間界でいう…鷺という鳥に似ているだろうか。

モンスターは、教室の上を浮遊し、生徒を監視している。

すると、一体のモンスターが、天空のいる教卓にとまった。

グルル…………。

「よし。欠席はいないようだな。」

いつも、このモンスターが出席を数えているのだ。

天空は、人間学という科目を教えている。

「では、教科書121ページを開いて。」

生徒は、迷いもなく一斉にバツと教科書を開く。

「今日は、人間の“運命”について勉強する。」

——“人間学”

人間と私達…どう違うのかしら。

「人間の人生は、一定ではない。毎日転機がある。些細な出来事も、変化の一つであり、それに対し、人間も向き合い、変化するのが基本。」

天空が教科書を読み上げた。

続いて、黒板に綺麗な字で書いていく。

「人生は上昇すれば、下降もすることを頭に入れておくこと。人間は俺達が作り出す、運命の変化から逃れることは不可能だ。」

でも、結局、与えられた運命を元にどうするかは、人間が決めることだ。」

——うんうん。でも、結局辛い運命を避けることしか考えていなくて、努力もしない人間も沢山いるのよね、きっと。

美月の両親が月騎士であることから、風舞家は、人間の話題が尽きなかった。

「しかし…運命を作り出す事は、容易じゃない。」

天空は生徒の方を振り返った。

「元々の人生のベースは誰にでもあるんだ。

だけど、そのベースに様々な運命をうまく作ってあげて、人生を豊かにさせてやるのが俺達の仕事。その人間に合わせて考えるのは、非常に難しい。」

「それは、なぜですか？」

一人の生徒が質問した。

「担当する人間の性質をすべて把握し、そこに誤りがあつてはならないからだ。」

誤りがあれば、その人間の魂が望んでいることと違ったことをしてしまう。

運命を背負うことは、命を背負うのと一緒になんだ。」

「重そうですね。」

「重いよ。でも、この仕事をしていると、いいことも沢山ある。」

「何ですか？」

「それは、仕事をしてのお楽しみだ。」

——天空の目、なんだか輝いてる気がする。

「先生は、こう思うんだ。」

あたしを見つめる真剣な顔。

「運命をどのように乗り越えていくか…それは、人間の人生の課題なんだろうなって。」

——人生……。

「実は、俺は人間を担当する時、いつもやってることがあってね。」

「例えば、苦しい運命を作り出した後に、その運命から逃げださな
いたための方法を作り出してあげるんだ。」

絶望を感じただけで、その人間が何も学んでいなかったら、立ち上
がれるきっかけを与えてやる。

ただ…気付くか、気付かないかはソイツ次第だな。」

ここで、一人の生徒が手を挙げて質問をした。

「それでも、人間が諦めたらどうすればいいんですか？」

「俺達の力不足だ。」

「不慮の事故などは、どうなんですか？」

「うん。先程言ったが、運命のベースは必ずあるんだ。それは、俺

達にも変えられない。

まあ、回避させることは出来るが、うまくいくか…。

担当者は、その時が来るまで、人間が悔いのないように生きる運命を作ったんじゃないかな。」

———なんだか、複雑な気持ち。

って、あれ？天空がいない。

「風舞。お前だけだ、ノートを取っていないのは。」

「うわっ！！」

天空の話に夢中でモンスターが机にとまっていることに気付かなかった。

バサッバサッ

モンスターの大きな翼で頭を叩かれる。

「きゃあ！止めてっ…。ごめんなさいっ。」

「そこまで。もういいぞ。」

天空の言葉を聞いたモンスターは、叩くのを止めて、また空中に舞い上がった。

美月は、天空をキッと睨む。

——なによ。最悪。

すると隣のクラスメイトが天空に言った。

「先生。この間の風舞さんのように、私達が人間を殺めてしまうこともあるんですか？」

一瞬、時が止まったかのように教室は、静まり返った。

「……………！！」

美月は黙ったまま、俯いてる。

ガタッ

「おい、風舞！」

美月は席を立ち、走ってその場からいなくなってしまった。

——あたしはどうすればいいの。

——やはり、この子達には感情がない。

天空は、思った。

ただの人形のように、冷酷で残虐だ。

終わりを告げるチャイムに、機械的に教科書やノートをしまう生徒達。

質問をした本人も教科書をしまっていた。

「ちょっといいか。質問した君。ちょっとおいで。」

——たく。しょうがないな。

美月を捕まえる前に、この子をなんとかしなければ…。

「お前なあ… あれは友達に言う言葉じゃないよな？」

何かを言ったところでわかるはずがないか…。

なぜなら彼らは心を持っていないのだから。

天空は、美月の気持ちを考えると、胸が痛くなったのだった。

死の番人（前書き）

屋敷を出てから、輝瞳^{きらと}は天国に行きます。

死の番人が登場。

彼の名前は、黒川^{くろかわ}友吉^{ともき}。

黒川を見守っていた心優しい月騎士のことが書いてあります。

死の番人

——隠者様。天国への道はこちらですか？

「名はなんという…？」

——鬼百輝瞳。

「こちらへ来るんじゃない…。」

暗い暗い闇の中、見えたのは一つの灯。

ゆっくりゆっくり進んでいく。

怖さなんかより、早く二人に逢いたかった。

「隠者様…！」

ようやく灯の近くまで行くと、黒いマントを羽織る一人の老人が立っていた。

「おやおや、こんな小さな体で…よくそこまで参りましたな。

生きている人間がこの死の世界へ来たのは、珍しいことじゃ。」

「へへっ。って、あれ…？おじいさんは誰…？確か、前に来た時は、違う人だったよ。」

「ああ…それは、先代のことですな。彼は、昨日、死の番人から解放されたのでございます。」

老人は、とても穏やかな顔で言った。

「先代ってことは、おじいさんのお父さんだったの！？」

そう輝瞳が尋ねると、老人は、首を横に振った。

「我々は他人。交代で担当を行っているのです。」

…さあさあ、ご案内致しましょう。」

“隠者”であるこの老人は、“死の番人”とも呼ばれている。

死の世界で、死者の魂を管理する役目を担っている。

また、輝瞳のように時々、生きている人間が来訪することもあるの
で、天国や地獄を案内する役目もある。

「ふうん…。ところで隠者様、前から気になっていたことがあるん
だけどさ…なんで死の番人なんてやってるの？」

輝瞳は、暗い道を歩きながら尋ねた。

「ふふっ…。話が長くなりますが、よろしいかな？」

「うんっ！いいよ！」

「私は、人間として死ぬ前、とても罪深いことをしてしまったので
す。」

——とあるビルの屋上…

「もう、どうしようもないんだ…。」

微かに風が吹き、男は、生きる希望を無くしていた。

「大丈夫か。おじさん？」

優しく、労るような声…。

「だっ…誰だ！？どこにいる！」

——姿は見えないが、あの時、はっきりと男の声が聞こえたんじゃ。

「こうなったら、もう俺にはどうしようもないか…」

おじさん。もう一回、人生をやり直してみないか？」

「何をバカな…！クソッ。みんな俺をバカにしゃがって…。生きてても、いいことなんてないんだよ！」

返事は無かった…。

「空耳か…。ハハツ…だよなあ。人生やり直す、なんて。俺は、一体何を考えてんだか。」

手には、可愛い息子の写真。

この手で、確かに、大事に育ててきた…俺の生きた証。

「お父さん、もう疲れちゃったよ。お前がいなくなって、生きる意味が無くなるなんて…。」

天国は、楽しいか？

でも、お前のことだから…もう友達は出来てるか。あ、お母さんもあるもんな。」

人懐っこい息子…太陽のような真っ直ぐで、明るい我が子。

「多分、俺は、お前のいる天国には行けないよ。だけど…。」

——もう、未練は無かった。

息子の写真をコートのポケットに、そつとしまい……

そのまま暗闇の中に飛び降りた。

——ふと気付いた時には、私は、真つ暗闇にいたんじや。

ここは、地獄か…。

「いや…ここは死の世界の入り口だ。」

この声は…やはりさっきのは、空耳ではなかった。

「死の世界……そうか。そうか…。俺は死ねたのか。」

「ああ…。おじさん、今から言うことをよく聞けよ。」

そうして、顔も分からぬ男の話を聞くことになった。

——死の世界には2つある。

ここを左に行くと、天国。

右に行くと、地獄。

そして、この世は、3つの世界に分かれている。

人間界、地上界、そして、おじさんが今から行く死の世界。

おじさんは、まだ人生が全う出来ていなかったから、地獄行きになったがな。

「ああ、わかっているよ。」

悪いな。審判では、俺がおじさんの私情を訴えたんだが、やはり自ら命を犠牲にしたことで、罪人として扱われた。

「審判……。地獄は、恐ろしいものかい？」

——そうだな……。それは、行ってから、自分で感じることさ。

おじさんの魂は、審判にかけられた時には、やはり輝きを失っていて、もう魂が使いものにならなかったんだ。

「魂とは、元は輝いているものなのか？」

——そう。どの魂も、とても美しくて、輝きに満ちている。だから、今から磨きに行くんだ。

「…どういうことだ？」

——地獄とは、魂を復活させる場所なんだ。

だが、輝きを取り戻すには、かなりの時間、忍耐力、意志の強さが必要だな。

「そうしたら、結果はどうなるんだ？」

——もし、努力が認められて、魂が復活出来ると審判で見込まれたら、地獄から脱出出来る。

そして、また一から人間に生まれ変わるんだ。

「さ、ここが地獄。……ここでお別れだ。
アンタなら、絶対生まれ変われるさ。」

なんせ、俺の親友が大事に見守ってきた人間なんだから……。」

「え……？」

俺は、何かに暖かく包まれている感じがした。

大きな漆黒の扉。

「待ってくれ。君は、どこの世界の人なんだい？」

——地上界さ。頑張れ、黒川友吉さん。
くろかわともき

「その声は、そこで途切れた。私は、決心をしたんじゃない。」

——息子を殺された悲しみから死んだ。だが、息子が天国にいることを信じ、前へ進んでみよう。

「漆黒の扉は、やけに重たく感じた。後から、聞かされたことじゃが……扉が重いと感ずる程、背負う罪も重いのだと。」

「そうだったのか……。で、隠者様は、その後どうしたの？」

「私は懸命に働いた。朝、昼、晩と、次期に生まれ変わる人間の準備を手伝っていたんじゃないか。」

——次々に検査にやってくる魂。欠陥がないかを確認、汚れていないかチェックする。

時々、羨ましくも思った。これから新たに生まれるこの人間達は、幸せだと。

「その仕事の最中、私が必ずやることはありません。」

「へえ。どんなこと？」

輝瞳は、真剣な眼差しで、隠者を見つめた。

「幸せなれ、人生を楽しんでこいと願いをこめ、優しく包んであげるんじやよ。」

それから、人間界に送ってあげるんじや。」

隠者は、優しく微笑んでいた。

「なんだか、隠者様、好きになつてきちゃった。」

でも、辛いこと——っぱいあつたでしょ？」

「もちろんじや。山ほど。」

——「黒川！まだ仕事があるだろう？これじゃあ、いつまでたつても生まれ変われないぞ！」

“もう、嫌だ……。綺麗な魂なんて見たくない。”

叱られる日々……黙々とこなす仕事。

「じゃが、私は先程、その地獄から這い上がり、死の番人に就くことが出来た。」

「次のステップは、死の番人なんだね。」

「そうじゃ。死の番人の役目を終えた後、やっと人間として生まれ変われるんじゃ。」

「やったー！嬉しいよ、僕も。」

「じゃが、私がここまでやってこれたのも、あの声の男の存在があったからかもしれん。」

——“そう言えば、黒川さん。あなたの人間時代、地上界の担当者2人いたんですってね。珍しいわね。”

地獄資料係が話し掛けてきた。

“へえ。一人じゃなかったのかい。”

“あら。ご存知無かったの？一人は、貴方の絶望を変えようとして、失敗したらしく、亡くなってしまったそうよ。”

“失敗した……？”

“息子さんを殺めた犯人が近くにいたらしくて……貴方から遠ざけようとしたらしいの。だけど、犯人側にも担当者がついているわけですよ。そこで、月騎士同士の争いが起こったそうよ。”

——「おい。邪魔だ、どけ。」

「黒川は、心を痛めているんだ。」

人間は大切にしていたものを奪われると、悲しみが耐えられなくなるって、アンタだって理解しているだろ。

彼は、自分を犠牲にするような優しい性質を持っているんだ。

でも、もしかしたら君が担当している人間が、黒川に殺されるかもしれないんだぞ。」

「ああ。それがどうした？誰があんな雑魚に殺られるかよ。」

貴様も、あの人間も臆病だな。

お前、嫌なんだろう？自分の人間が自殺者が殺人犯になるのがな！」

——違う。ただ、黒川を守りたいんだ。

「君の人間は、最低だと思っていたが、やはり担当者の責任もあるな。」

「ククツ…貴様、人のこと言えんのかあ？…貴様らも、弱い者同士じゃないか。」

そして…月騎士の失格。感情というものがあるなんて。

…だが、面白い。貴様の担当する人間から遠ざけてやってもいいぜ。但し、条件がある。」

——月が不気味な夜。

「最悪だよ。会社クビかよ…。リ・ス・ト・ラ？この俺が？ハハッ…。」

酒に酔っていた犯人の男の前に、目の前姿を現した青年。

「誰だ、テメエ。」

「もう、自首してください。このままでは、貴方の魂が危ないんです…。」

「なんだよ、知ってんのか…俺が黒川さんちの息子を殺めたって…？」

カラン…

ニヤリと笑った犯人の目の前に、なんとナイフが落ちてきた。

——ナイフ！？

「ラッキー！こんなところにナイフ！」

まさか！！

すると犯人の後ろから、さっきの月騎士が現れた。

“この愚か者め。天才と名高いこの俺様がお前のようなクズの提案を受け入れるとも思ったか。”

——
“条件？”

——
“ああ。貴様が直接言ってくれよ。もうやめて下さいって。いちいち俺が運命変えんのも面倒だし。”

——
“仕方ない。いいだろう。”

「貴様…最初からこれが目的で！」

“しーっ！人間に姿が見えねえんだから、変に思われちゃうだろ。リストラを仕向けたのはこの俺！人間はなあ、悲しいと絶望だけで終わるんじゃないよ。”

「……………！」

“絶望から、とてつもない怒りに変わるんだよ。”

「ハハッ…お兄—さんバイバイ！」

シリシリと犯人が青年に迫る。

“ 黙れ！お前は、偽装の魂で得た功績しかないじゃないか！人間の魂の本当の中身は、汚れている。”

“ 若い坊や。月騎士はなあ、功績を挙げてなんぼの世界。残念だったなあ。”

「おい！」

ハツとした瞬間、犯人のニヤケた顔と自分の腹の痛み。

「黒川……友吉……。どうか……助けてあげ……」

—— 知らなかった。私のために犠牲になった命を。

「そんな…バカな。俺は、なんてことを……」

—— 自分のしたことが、どれ程罪深いか、理解したと同時に、こんな俺を見守っていてくれた存在に驚いた。

「も、もう一人の担当者は？」

「任期は、ほんの僅かだったそうよ。貴方が自殺する時点に代わったらしいの。」

——おじさんなら、生まれ変われるよ。

「まさか…あの声の男か！」

「二人目の担当者は、一人目の月騎士の親友だったそうよ。親友の代わりに最期を看取ったって。」

「名前は……？その男達の！」

「それは、非公開なんです。月騎士のルールで、担当していた人間にバレてはいけないことになっているそうで。」

未だに暗い道を歩く二人。

「そっかあ…名前がわかれば、逢えるかもしれないのにね。」

「ああ…じゃが、もう逢う勇氣など、残っとらんよ。」

隠者は、少し悲しそうに笑っていた。

「でも、本当に逢いたくないの？」

「いや…しかし、逢うには、手掛かりがないと無理じゃ。」

「搜すよ！僕が！」

「ありがとうございます。貴方は、優しい方だ。もうすぐ、天国への入り口に到着ですな。」

光が見えてきた。

「ねえ、隠者様も天国に行ってみない？」

「いいえ…私は…」

真っ白の扉。

「では、ここでお別れでございます。よい時間を。」

エイッ

「うわぁっ——!!」

輝瞳は、無理矢理に隠者を天国へ飛ばした。

「ふう……逢えるといいな、隠者様。僕も行こー!」

眩しすぎる光に導かれるように飛び込んだ。

——今行くよ、二人とも。

美月の両親に逢うために……。

隠者と青年（前書き）

隠者である、黒川友吉は天国へ飛ばされます。

そこである奇跡の出逢いをします。

相澤陸は、黒川の担当者だった月騎士。

風舞美月の両親、風舞輝夜、世絆。

今は亡き、彼らの魂はどうなったのだろうか。

隠者と青年

——もう一度、生きたい。

ドンッ！！

「いたたた……。」

隠者は、輝瞳に無理矢理押し込まれたため、頭から落下してしまっ
た。

「あの……？大丈夫ですか？」

ハッと前を見ると、知らない青年が心配そうに私を覗きこんでいた。

「いや……いや。大変お見苦しいところをお見せしたようじゃ。私は、
大丈夫でございます。では……。」

「待ってくれ！」

青年が隠者を呼び止めた。

「何か…私にご用で…？」

「え…あ、いや。その……格好から察するに…貴方は、隠者ですか？」

「はい。私は、隠者。それが何か…？」

「……………！」

青年は、驚いた顔で隠者を見ている。

「…隠者などが、こんな美しい世界にいては、おかしいと思われるのも当然でしょうな。
すぐに仕事に戻らなければなりません。」

「しかし…用があるからここに来たんじゃないんですか？」

「はい…少し、人を捜してましてな。」

「どんな人なんですか？」

「それが……恥ずかしながら、わからんです。」

「一緒に搜しましょうか。」

「隠者の用事を手伝わせるとは、とんでもない。」

「いいんだ。貴方……いや、隠者が天国へ来るなんて滅多に無いことだから、興味があつて。とりあえず、座りませんか？」

こうして青年と隠者の話が始まった。

「貴方は、地獄から這い上がって来られたんですね？」

「そうじゃ。」

「辛いことも、あつたでしょう。」

「ああ……地獄は、とてつもない絶望に満ちた世界じゃった。

だが、生まれ変わるために、今まで必死で仕事をしてきたつもりじや。」

「どうして生まれ変わりたいと？」

「人間時代、自殺をしましてな。息子を殺された無念と、喪失感のまま飛び降りる。」

「……………」

「私は逃げることしか考えていなかった。一番楽な運命を選んだというわけじゃ。」

「なるほど……。」

「しかし、ある人から月騎士のことを少しだけ耳にしましてな。」

「月騎士……………」

「私の担当者のございます。真実を聞いた時、どうしてあの日、死ぬ選択しか出来なかったのか、非常に後悔しておるのです。」

「後悔を……。」

青年は少しだけ悲しそうな顔をした。

「はい。しかし、今度生まれ変わったら、どんなことから逃げ出さない、強い人間になりたいと思っています。」

「そうですね……もしかして、その月騎士が逢いたい人？」

「はい。しかし、名前は非公開。若い青年がこの私のために亡くなったとは……正直、受け止めるのが辛かったです。」

「……………」

「魂をチェックする際に、必ず幸せになれと願いを込め、人間界に送っていました。それは、その青年や息子に向けたものでもありました。」

「優しい方ですね。」

「いいや。ただ魂を見ながら、彼らではないかと、思ったただけでございます。」

しかし、やはり逢えなかった。手紙は書いていたんじゃない。」

一枚の手紙をポケットから取り出す。

「その話……僕の友人が同じことを言っていた。貴方は、黒川友吉さん？」

「ああ！そうじゃ！」

黒川は、驚きのあまり大声をあげた。

「やはり。しかし彼は、人間界へ旅立ちました。」

「そうか……！そうだったのか……。良かった。」

「貴方同様、彼から手紙を預かっていました。どうぞ。」

一枚の手紙を差し出す。

「これは。なんと！しかし、私の手紙は、結局、無駄になってしまいましたな。」

ハハッと笑う黒川。

「良ければ、僕が代わりに預かっておきましょうか…？自分で持っていて、仕方ないでしょう。」

「確かに自分で持っていて、仕方ありませんもんな。ありがとうございます。」

丁寧にお辞儀をした。

「こちらこそ。本当にありがとう。貴方なら、きっと生まれ変わる。また僕は信じていますよ。」

「え……また、とは？」

「黒川さん、もう仕事に戻らなくてはならない時間では？」

「ハッ！私としたことが…すっかり忘れておりました。」

「ふふっ…いつかまた生まれ変わったら、逢えるといいですね。では、また。」

「はい。奇跡はあるんじゃない……。本当にありがとうございます。では、また。」

隠者と呼ばれる黒川友吉は去っていく。

——黒川。よく、頑張ったな。

「あ！隠者様……！！」

そこにいたのは、少し目を腫らした輝瞳。

「どうしたんじゃない？」

「さっき、さっきね、逢いたかった二人を捜してたんだ。そしたら……」

「そしたら……？」

「もういなくなってたんだ。……生まれ変わったんだって。」

また輝瞳は泣き出した。

「それは、とても喜ばしいことではございませんか。」

「そ、そうだよ。幸せになれるよね……。」

「はい。そう願いを込めよう。」

——輝夜、世絆。

美月は、必ず守るから。

「そう言えば、月騎士と息子さん見つかった？」

「いいえ…。月騎士の方は、旅立ったようで。しかし、手紙を預かりました。」

「そつかあ…早く読んでみてよ！」

「緊張しますな……。」

綺麗な白い封筒を開けると、丁寧に二つ折りにしてある手紙を手にとった。

ピラ……

——黒川友吉さんへ。

お元気ですか？

僕の親友から、貴方が地獄へ送られたと聞き、大変ショックを受けました。もし、僕が生きていたら…貴方はそんな辛い運命を背負うことは無かったかもしれない。

そう思うと、苦しくて…。役に立てなかったこと、申し訳なく思います。

親友は、風舞輝夜と言います。物凄く頭が良くて、優しくて、何より思いやりがある。

だからこそ僕は、貴方の最期を彼に託しました。彼はきつと、貴方に対して勇気付ける言葉を贈ってくれたのではないのでしょうか？

貴方の人生、長い間、僕なりに一生懸命見て参りました。

生まれた時の赤ん坊の貴方を見たとき、感動したこと、今でも覚えております。この人間を何としてでも守ろう。そう感じたのです。

成長するにつれ、段々と大人らしくなっていく貴方。友達に苛められて、沢山嫌な経験もしましたね。受験勉強を必死にする貴方。辛くて泣きながらも懸命に乗り越えましたね。志望校に受かり、達成感や、嬉しさ、沢山感じましたね。

医者になる夢、現実になりました。僕は、貴方のその夢、知っていました。だから僕も、必死で考えましたよ。

そして、大切な人に出逢いました。本当はね、もっとお相手がいたんですよ。だけど、一番いい相手、選びましたね。結構人を見る目あることに感心していました。

新しい命も誕生しましたね。僕も嬉しかったです。

しかし、悲劇は起こり貴方にもふりかかってしまいました。

今までにない喪失感を感じていた貴方。

僕は、これまで色々な経験を貴方に積ませたつもりでした。

実は、この悲劇が起こること、知っていました。だけど、貴方には本当は、この先、長い人生があった。だから、何とかしようと、僕があれこれ運命を与えました。

しかし…ダメでした。意外と頑固で融通が利かない性格からか、見向きもせずに、ただひたすら絶望の道へ進む貴方。

僕は、どうしても守りたかった。

本当は、大好きで、長年の親友のようだったんです。

だから、月騎士としての限界を越える行動をしてしまいました。

すみません…。結構、貴方にはなんのプラスにもならなかった。

この行動に悔いはありません。でも不思議ですね。人間の人生を背負う月騎士の僕が、自分が殺されるという運命を知らなかったなんて。

僕ら月騎士の運命は、一体誰が決めているのでしょうか。でも、僕は確かに、自分の意志で動きました。

それと…息子さん、旅立ちましたよ。見届けて参りました。

最後に、ありがとうございます。貴方よって、僕の人生が豊かになったこと、間違いありません。

生まれ変わるまで、頑張ってください。努力家の貴方なら、軽いものでしょう？なんせ、僕が育てた美しい魂なのだから。

また、会う日まで。

P・S・おめでとう、黒川。僕は、もう旅立ちます。逢えてよかった。

相澤陸あいはわらじくより。

「……………隠者様。会ったんじゃないの…？」

「……………先程の…青年。」

大粒の涙を流す黒川。

「息子も生まれ変わって…。」

もう一度、人間として生きたいものじゃ…。」

輝瞳は、手紙にあった輝夜の名前に驚いていた。

「輝夜らしいや…。幸せになれ。縛られず、自由な世界で。」

「まさか、逢えるなんて…。」

ペラ……

——名前も知らない貴方へ。

えと…。なんとなく言ったら良いか…私としては、初めまして…なので
すね。

今まで、私の人生を担当してくれた貴方は、一体どんな人なのでしょう
うか。

自分の身を犠牲にしてまで、僕を助けようとしてくれたんですね。
本当にありがとうございます。そして、ごめんなさい。

話を聞いた時、自分は自殺しか頭に無かったことに、後悔しております。

しかし、もっと生きたい…そう思わなかったのは事実です。

私は今、地獄で懸命に働いております。毎日、新しい魂をチエツクし、送り出す作業。周りは厳しく、人間時代よりも辛いかもしれ
ません。しかし、今度、死の番人、隠者への昇格が決まりました。

貴方が知恵や、経験を沢山与えてくれたおかげで、僕は様々な感情
を覚えていったのですね。

すべて、貴方が与えてくれた運命だと思うと、なんだか貴方の性格
が滲み出ているようで、面白いです。

貴方は、もう生まれ変わったのでしょうか？まだだとしたら、もう一
度、貴方に逢いたい。そう願わずにはいられません。

最後に、いつかまた会える日まで。

本当にありがとうございます。貴方のような優しい方に出逢ったこと、私は誇り

に思います。

黒川友吉より。

「黒川…。おめでとう。後少しで…。」

大粒の涙を流す青年。

「相澤陸さんですね？おめでとうございませう。生まれ変わりの準備が整いました。」

「はい…。あの、」

「なんででしょう？」

「新しく生まれ変わる僕の記憶に、この手紙の記憶を入れることは…。」

「貴方が心ですつと忘れないと願ってれば、生まれ変わっても必ず覚えているものです。」

「そうか…。心に染み付いてるもんな。」

「では、参りましょう。」

「はい。」

黒川は、カプセルに入れられる。

涙を流しながら最期にこう言った。

「また、逢えますように…。」

ビューン……

黒川は、小さな美しい魂となった。

残ったのは、青年の生きた証が書き残した手紙だけだった。

人間の少女（前書き）

美月が学園を出てからの話です。

人間の少女、天羽優心あまづにこが登場します。

そして、新たな敵、龍神剣りゅうしんけん。

二人とも、これからの重要人物です。

人間の少女

「美月！美月っ！」

——どこ行っただよ、まったく…。

美月が教室を出ていった後、行方がわからなくなっていた。

天空は、学園を飛び出して美月が行きそうな場所を考えていた。

すると、突然、天空の前に黒い渦が現れた。

「なんだ…！？」

「ご機嫌よう、藤真先生。あなたもご苦労様ね。」

そこに現れたのは、小夜先生だった。

彼女の周りには上層部の護衛班もいる。

「何ですか？小夜先生。」

彼女から嫌な気配を感じ、天空は、身構えた。

「ふふっ……。あの娘を想う貴方の心は、汚れているわね。そして、上層部の敵となる存在。」

「上層部の敵……？」

「先程、上層部から命令が下ったわ。」

——なんだ……？

「藤真天空は、今日を最後に、月騎士を引退せよ」と。

「……………！」

——夕方、雨が降っている人間界。

「最悪……せつかく来たのに雨なんて。」

雨は、勢いを増してきた。

——あたしを歓迎してないって訳ね。

しばらく雨に打たれながら、フラフラと歩いていると、傘売り場を見つけた。

「って言っても、傘買うお金持っていないし……。」

美月は、お財布の中を見た。

「地上界のお金なんて、使えないわよね。」

——まず、お札の顔違うし……。

これじゃ人間界では、ニセ札よね。ただの紙切れと同じか……。

やっぱり帰ろうかしら……でもあんな風に学園を抜け出してきた以上、すぐに戻るのもどうかと思うし……。

「あの…大丈夫ですか？」

美月が困っていると、いきなり後ろから声を掛けられた。

後ろを振り返ると、美月と同じ年ぐらいの少女が立っていた。

「良かったらこれ、使ってください。」

差し出された花柄の可愛い傘。

「え…いや…大丈夫ですつ。」

本当は、とても嬉しかったが、相手が濡れるのが気になって受け取れなかった。

「いいんですよ。はい。」

少女は、まるで美月の心を読んだかの様に言った。

そして、いつまでも突っ立っている美月の手を引っ張り、無理やり持たせた。

「あ……。」

じっと少女を見つめる美月。ある異変に気付いた。

「あの、何か……？」

自分の顔をじっと見つめられて、不思議に思ったのだろう。

「あ……いいえ。なんでも。傘……どうも。」

少女はニコツと笑って、足早でもなくゆっくりと歩いていく。

「あの子、ちょっと変ね……。」

美月は、少女の背後にいた影が気になり、後を追ってみた。

すると……

「やっぱりね。」

——担当者が違う…。誰よあれ。

「さあて、どうしましょうか。」

——あたしとあの少女は関係ない。

助けようか放っておこうか迷う美月。

自分の持っている可愛い傘を見つめた。

「ふう…。仕方ないわね。悪い子じゃなさそうだし、それに天空も絡んでるみたいだしね。」

——えっと…助けるには、あの子を眠らせなければ……。とにかく、人目のつかないところに連れていくしかないわね。

美月は、早足で少女に近付く。

「ねえ、ちょっと…。」

「はい…。あつ、貴方はさっきの。」

後ろから声をかけられ力無く振り向いた少女は、顔色がかなり悪かった。

「濡れて帰るのも風邪をひいてしまいますから、一緒に入りませんか？」

美月は、少女が怯えないように優しい声で提案してみた。

「大丈夫です。私にお構い無く…。本当に平気ですから。」

そうして彼女はまた歩き出そうとする。

「待って！貴方の顔色が優れないからそう思ったの。傘を貸してくれたお礼に、家まで送ります！」

「え…」

少女は、しつこい美月に観念したのか、家を教えた。

「ここです。」

少し歩いて、少女が指差したのは、小さなアパートだった。

家に着き、美月は、少女の後ろから玄関に入る。

「わざわざ、ありがとうございました。」

少女が振り向いた瞬間。

「きゃっ!!」

美月は、いきなり少女の額を掴み押さえる。

「何するの……!!」

少女は抵抗するが、力が入らない。

「ごめんなさいね、手荒くて。」

——早くしないと、この子が危ない。

ボオと美月の手から光が放たれ、意識を失う少女。

ドサッ

少女は、玄関の壁に倒れた。

「ふう……何であたしがこんなことまで。

さあ、早く出てきなさい。」

ゴ——……

突然現れた黒い渦。

美月は、一瞬、闇に引きずり込まれる感覚に襲われた。

「ククク……さすがは輝夜の娘だ。俺の闇術にかからないとは。」

現れたのは、長身の黒い服を着た男。

——お父さんの知り合い…？

「貴方は誰…？」

「俺は、龍神劍。
りゅうしんけん

初めまして、お嬢ちゃん。お前のお父さんのことは、よく知ってるよ。」

不気味に笑う男。

「貴方は、この少女の担当者じゃないわよね？」

「ああ。もうすぐこの娘は死ぬだろ？」

お前にも死期が見えてるはずだ。

月騎士が不在のまま最期を向かえるなんて、人間として可哀想だと思わないか？」

「それでも、人の担当を奪うなんてルール違反よ。本来の担当者は、藤真天空のはず。なぜ貴方が？」

龍神は、腕を組みながら興味深そうに美月を観察していた。

「ククッ…。奴はなあ、もう月騎士を引退したんだぜ？」

心の中で驚く美月。

「どっいつこと…？とにかく、その少女から手を引いて。」

「藤真のことは、詳しく聞かないのか。奴は、あんなにお前のことを心配しているのに？」

ニヤリと笑う龍神は、二人が面白くて仕方がなかった。

「まずは、この少女が第一優先よ。貴方は、どうする気なの？」

「可哀想な藤真。なんにも想われちゃいないみたいだ。

さてと……早いとこ終わらせちまわないとな。」

手には鋭いナイフが握られていた。

「殺す気なの…？」

「ああ。お前に究極の絶望を味合わせるために。」

「どういう意味よ。」

この少女、あたしと何か関係が…？」

「うるせえな！！黙れ！」

俺はなあ、この仕事で月騎士の昇格がかかってんだよ。

大体、お前に見つかるなんて、予想外だったぜ、手間掛けさせやがって。」

そう言っつて少女の首にナイフをあてる。

美月は、手に短剣を握り、構える。

「その子から離れてって言ってるでしょ？」

逃げなかったこと、後悔させてあげるわ。」

——龍神剣。なんなの…。

「やる気か？お嬢ちゃん。俺は結構手強いよ。」

ま、ガキの頃から上に鍛え上げられてるから、少しは相手になるか。

まずは、お手並み拝見としよう。」

龍神は闇呪文を唱え始めた。

辺りは闇に包まれ、殺気が漂う。

シュルル……

——蛇…？

シャアア——……

毒蛇が何匹も美月に絡み付く。

そして、ガブツと美月に噛みついた。

「あら……！」

「毒蛇だよ、お嬢ちゃん。呆気ないね。もう動けないだろ？」

美月の心臓めがけてナイフが飛んできた。

「ククッ。」

見事に心臓に的中し、美月はそのまま倒れた。

「へえ。なかなかやるね。お嬢ちゃん。」

龍神がバツと振り返った瞬間、剣と剣がぶつかった。

「…毒蛇が効かないのか。面白い。」

龍神は、闇に消えた。

ビューン

後ろから飛んできたナイフをかわす。

「かわしてばかりだなあ。早く攻撃してみろよ。」

——これじゃ、きりがない。

美月は、さっきの蛇と交信をした。

——主の元へお行き。

シュルル……

「見つけた…。」

蛇はある一点に静止した。

「チツ。まだガキのくせに調子に乗りやがって。」

「蛇の扱いは得意分野なの。」

美月は、どんどん攻めて行く。

追い詰めて、止めを刺そうとした瞬間、

「お嬢ちゃん、残念だな。俺の勝ちだ。」

気付くと、自分の手足が何かの糸で引つ張られていた。

「あたしとしたことが、いつの間に…。」

「もう動けないだろ？可哀想に、捕らわれた獲物のようだ。」

そう言いながら、美月の側に近付いてくる。

「お前を殺す命令は出てなかった。」

ただ上層部は、この少女を殺せと。けれど…風舞美月。

お前を殺すことで俺は最強の月騎士になれるかもしれない。」

「ふふっ…上層部の命令に背いていいの…?」

「ククッ…。奴等にはこの俺様が必要なんだよ！お前じゃない。」

「そうかしら…?」

——あたし、ここで死ぬのね。

「最後に一つだけ教えてやろう。」

鋭いナイフが心臓に向けられる。

「月騎士で感情を持つ者は、必ず最期に滅びるんだよ。」

ニヤリと笑って、ナイフを振りかざす。

「……………!」

自然と目を瞑っていた美月だが、痛さは感じない。

恐る恐る目を開けると…

「あつ！天空の……。」

そこにいたのは、教室にいた四体のモンスター達。

「何だ！こいつら！」

彼らは、龍神の全身に容赦無く食らい付く。

一体のモンスターが、美月の身体に絡む糸を解いた。

「あつ…！あの子！」

——姿が見えない！まさか、龍神に！

——安心しろ。天空様のご命令であの娘は、我々が確保している。

天空のモンスター達は、あの少女の味方の様だった。

「クッ……藤真め……」

敵わないと思ったのか、龍神は黒い渦に巻かれていく。

「クソ……。風舞美月……この手で殺してやる。」

部屋は、さっきまでの明るさを取り戻した。

残ったのは、美月と少女とモンスター達。

「どうも。助かったわ。」

——天空様のために助けただけだ。

——この少女は、天空様の担当の人間。守る義務があるのだ。

「そう……。あの、天空はなぜ月騎士を辞めたの……?」

——お前のせいだ。お前さえいなければ主は苦しまなくてすんだ。理由を知りたければ、地上界に戻れ。

そう言ってモンスター達は姿を消した。

「あたしのせい…？」

少女は、きちんとベッドに寝かされていた。

ガチャガチャ…

鍵が開く音が聞こえた。

「天羽さん！？天羽あもつにこ優心さん！」

どうやら救急隊員の様だった。

「病気…。でも、もう大丈夫よね。あのモンスター達が呼んだのかしら。」

——とにかく、あたし戻らなきゃ。

美月は、救急隊員に運ばれるこの少女を見届けた後、嫌な予感を抱

いたまま、人間界を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6329y/>

美しい月の夜に....

2011年12月1日20時49分発行